

三人の詩人と李白の人生
～春と別れと酒と故郷～

広島県立西条特別支援学校
高等部第2学年 三田 晨歌

三人の詩人と李白の人生

く春と別れと酒と故郷く

三田晨歌

春 曉	孟 浩 然
春 眠 不 覺 曉	
処 処 聞 啼 鳥	
夜 來 風 雨 聲	
花 落 知 多 少	
唐 詩 選	

春曉
孟浩然
春眠を覚えず
処処に啼鳥を聞く
夜來風雨の聲
花落つること知る多少ぞ

一 自分がよく使うことばに変えて

春曉 (孟浩然) 三田

春はとにかく眠いから、朝になっても気が付かない。
目覚めかけると、所々から鳥の声が聞こえる。
そういえば、寝る前に昨日の夜は嵐の音がしていたけど、
庭の花びらはどれだけ散ったかな？

二 孟浩然になつて質問に答えて（ホット・シーティングを終えて）

雪溶け

く 曙光るく

（春暁 孟浩然）

三田

雪が溶けだす弥生には、

山川さんせんの生き物が目を覚ます。

あの真つ白な野原から、

芽を出したのは青若葉。

死

く 春に散りゆく我が人生く

（春暁 孟浩然）

三田

死を迎えらるとなるならば、

絶望の文字、浮かびくる。

私に希望は何もない、

ただ死神を待つのみよ。

黄鶴楼送孟浩然之广陵

李白

故人西辞黄鹤楼

烟花三月下扬州

孤帆远影碧空尽

惟见长江天际流

唐詩選

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

李白

故人西のかた黄鶴楼を辞し

烟花三月揚州に下る

孤帆の遠影碧空に尽き

惟だ見る長江の天際に流るるを

一 自分がよく使うことばに変えて

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

(李白)

三田

昔なじみの孟浩然さんは、広陵の西にある黄鶴楼に別れを言って、

花に雲みたいな霧がたちこめる三月に、揚州へ船で下って行く。

孟浩然さんの一艘の舟の姿は、空に消えて見えなくなり、

後には長江が果てなく流れ続けるのが見えるだけ。

二 李白になって質問に答えて（ホット・シーティングを終えて）

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

（李白）

三田

私の友孟浩然さんは、西の黄鶴楼より去り、

花がけむる三月に揚州に下る。

その船の遠い影はだんだんと見えなくなり、

その後、ただ、ただ、長江が終わることなく流れている。

永遠の別れ

（黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

李白）

三田

空を見上げて思うのは、去っていった友のこと

見送れなかった悲しみは、もういえることはないだろう

永遠にもどりはしないあの人の

最期を見送ることできず

静 夜 思	李 白
牀 前 看 月 光	
疑 是 地 上 霜	
举 頭 望 山 月	
低 頭 思 故 郷	
唐 詩 選	

静夜思 李白
 牀前月光を看る
 疑ふらくは是れ地上の霜かと
 頭を挙げて山月を望み
 頭を低れて故郷を思ふ

一 自分がよく使うことばに変えて

静夜思 (李白) 三田

ベッドの周りを照らす月の光をじっと見ていると、
 その光は、まるで霜が降りたのかと思ってしまうくらい白く光っている。
 見上げれば、山の端にきれいに光る月が見えて、
 俯いて、しんみりとしながら故郷を思い出す。

二 主題を意識して

仮想と現実 (静夜思 李白) 三田

テレビをつけていつものアニメを見ていると、
 まるでその世界に入れたような気持ちになる。
 見終われば、その世界に入れないうなさが残り、
 見始めて、もう一度その世界に入り込む。

三 詩の形式をまねして

一つの欠片

(静夜思 李白) 三田

出来上がったばかりのジグゾーパズルをじっと見つめると、
まるで本当に全てのピースがあるのかと疑われるように見える。
少しすると、空いた所が見え、
しばらくして、無くなったピースのことを思う。

四 李白になって質問に答えて(ホット・シーティングを終えて)

静夜思

(李白) 三田

ベッドの辺りを照らす月の光をずっと見てたら、
その光はまるで霜が降りたんじやないかと思う程白く光ってる。
見上げれば、山のはじっこにきれいな月が見えて、
俯いて、故郷のことを思い出す。

経験(もとい、夢)

(静夜思 李白) 三田

夜、不意に目がさめて、夜風に当たろうとしたら、
まるで、黒い紙に絵の具を落としたような星空が広がる。
見上げたら、その星々がきらめき、
その景色を目に焼きつけて、そっと目を閉じた。

勸酒 于武陵
勸君金屈卮
滿酌不須辭
花發多風雨
人生足別離

『唐詩選』

酒を勧む

于武陵

君に勧む金屈卮

滿酌辭するを須ひず

花の發くや風雨多し

人生別離足る

一 自分がよく使うことばに変えて

勸酒

(于武陵)

三田

君に勧めよう、金の杯を。

いっぱいについだ酒を断らないでくれ。

花が咲くと、風雨が多くなるように、

人生にもまた、別れの多いものだから。

勸酒

(于武陵)

三田

お前にやろう、この酒を。

いっぱいについだ酒を飲みほしてくれ。

花が咲いたら、嵐が来るように、

人生も、別れがたくさんあるもんだ。

○ 李白の人生について

中国盛唐の詩人。賀知章らに推挙されて翰林供奉となる。高力士に憎まれてまもなく追放。のち安祿山のとき永王の軍に加わったため夜郎に流され、また各地を往来するうちに安徽省で死んだ。中国最高の詩人とされ、詩仙と呼ばれる。絶句と樂府（がふ）が最も得意。詩文集『李太白集』がある。（『ブリタニカ国際大百科事典・電子辞書』から引用してまとめた）

―『ブリタニカ国際大百科事典』の説明文を読んで。

李白の人生は放浪の連続なのだなと思わせられました。

李白は、蜀の人です。母親が太白金星を夢見てみごもったので、名を白、字を太白とつけたといっています。

天宝のはじめ長安へでます。玄宗に翰林院として仕えることになりました。この翰林院にいた四十二、三歳のころが、李白の、もっともはなやかな時代でした。酔いっづれ、天子のお呼びにもいかなかったりなどの気ままに過ごしました。杜甫の詩に「李白一斗詩百篇（李白は酒を一斗飲むと詩が百首できる）とうたわれています。（『漢詩への招待』156ページから引用してまとめた）

酒を愛する、李白らしい詩を紹介しましょう。「将進酒」は、じつに痛快な詩です。李白の酒は陽性の酒です。飲むと底ぬけに愉快になるのです。（『漢詩への招待』160ページから引用してまとめた）

なお李白は、酒がたたってか、中風になって、なくなっています。六十二歳でした。（『漢詩への招待』198ページから引用してまとめた）

―『漢詩への招待』の説明文を読んで。

李白は大酒のみで、自由な性格だなど思いましたが、ただ、好きな酒で死ん

ではたして幸せだったのかと思っしまいました。

陶淵明と李白は、酒の詩人の双璧といわれています。二人が生きた時代は三百年も離れています。李白は陶淵明のファンでした。次のような詩も残っています。題して「山中にて幽人と対酌す」。

若し先に酔えば、便ち客に語ぐ。「我酔うて眠らんと欲す。卿、去る可し」と。

李白は三百年の時を越え、陶淵明と飲んでいたのでした。『漢詩入門』43ページから引用してまとめた)

また、杜甫は律詩の名手だったので、李白は絶句を作るのが得意でした。『漢詩入門』73ページから引用してまとめた)

杜甫は、酒量もさることながら、李白の詩を作る速さに驚いています。一升ビン一本(原文ママ指導者註)を飲む間に、百篇もの詩を作りあげる、というのです。「飲中八仙歌」。李白は大酒くらうと、長安の繁華街のバーで、眠りこけてしまします。李白は当時、玄宗皇帝のおそばつきの詩人役をつとめていました。天子が物見遊山に出かけると、名勝古跡や四季の風物をその場で詩に詠じて献上する、仕事をしていました。

「天子呼び来れども船に上らず」というのは、天子が船遊びに出て、李白を呼べと命令するが、李白は酔って千鳥足、なかなか船にのぼれない。「自ら称す臣は是れ酒中の仙と」。私は、飲めば仙人。自由な仙人だから、ただの人間扱いされると、困りますぞ。

李白はただの大酒飲みではなく、官僚社会の常識や、社会の矛盾に醒めた眼を向けて、これを批判し、その気骨を示した詩をたくさんこしています。

たとえば、五言絶句「夏日山中」。

——白い鳥の羽根で作ったうちわで、風を送るのもめんどくさくて、みどりの林の中で、半裸になった。さらに頭巾をぬぎ、頭のとっぺんを松林の風にさらした。

行儀のわるい詩ですが、ここには当時の上層社会に対する、反抗の気分がこめられています。

「白羽扇」は、貴族たちが浮世ばなれした高尚な哲学談義をするときの、小道具です。そんなものを使うより、さっさと裸になるのが、一番だと。

当時の官僚社会では、人前で帽子を脱ぐのは、たいへん失礼なこと、恥ずかしいこととされていました。李白はそんな社会通念に従うのは、ごめん。自由にふるまえる山の中こそ、わが世界と考えていました。（『漢詩入門』76ページから引用してまとめた）

李白は詩の中で数字を効果的に使う名人でもありました。最もよく知られているのは、「白髮三千丈」でしょう。「秋浦の歌」という五言絶句にあり、「秋浦」は、当時の県名、今の安徽省貴池県のことです。この地でわが身の不遇をなげいて作った詩の一つだといわれています。

それにしても、「三千丈」は途方もない誇張です。しかし詩的誇張は、想像を絶した誇張か、あるいは事実にかなり近い誇張でないと、効果はあらず、中途半端な誇張では、かえって読者をしらせさせてしまいます。

李白は大きな数字を使うのが好きな詩人でした。（『漢詩入門』79ページから引用してまとめた）

数字で人を脅かしながら、その数字が案外事実に近いという例は、他の詩にもあります。

李白はもともとスケールの大きな人物でしたが、巧みに数字をつかうことによっても、スケールの大きな作品を生み出しました。『漢詩入門』83ページから引用してまとめた)

—『漢詩入門』の説明文を読んで。

こちらの本でも、李白の自由奔放な姿を垣間見ることができました。

しかし、人前で帽子を脱ぐのがマナー違反だということは初めて知りましたが、李白のそんなマナーなどという堅苦しいものに縛られずに、自由に生きようという気持ちが伝わってきます。

さらに、李白が数字が好きということが意外でした。なぜなら、李白には詩の才能があるけど、博学というイメージがなかったからです。

でも、確かに、三千丈は長すぎると思います。

○ これまででした漢詩の総合的な感想

一言でいうと、「楽しかった。」です。

訳詩を作るとき、頭をフル回転させて考えに考え、いい訳詩ができた時はうれしかったですし、何より、改めて、詩を書くことの楽しさに気付きました。

ホット・シーティングでは、李白や孟浩然になりきって答えたり、逆に質問したり。キャラを立てるのが大変でした。弱くてもダメ、強すぎると詩の方に行かない。難しいけど楽しかったひと時でした。

漢詩を通して、李白や孟浩然の過去に触れて、新しい一面が見れて、たくさんの訳詩を作って…楽しい单元でした。国語の中で唯一苦手だった漢詩ですが、楽しく勉強することができました。ありがとうございました。

○ 引用文献

- ・ 『漢詩への招待』 石川忠久 文藝春秋 二〇〇五
- ・ 『漢詩入門』 一海知義 岩波書店 一九九八

〈指導者の言葉〉

国語科「国語総合」の単元「漢文 漢詩の世界」において、「作者の詩にこめた深意を理解する」ことを目標に、「文章を読んで脚本にしたり，古典を現代の物語に書き換えたりすること。」，「出典を明示して文章や図表などを引用し，説明や意見などを書くこと。」の言語活動に取り組んでまとめた作品です。

作者の心情や漢詩の主題に迫るために，ホット・シーティングに取り組みました。ホット・シーティングとは，ある人物になりきって，その人物についての質問に答える活動です。作者の李白や孟浩然になりきって他の生徒からの質問に答えるホット・シーティングに取り組み，作者という自分と異なる立場に立って，詩の言葉を見つめ直しました。自分との共通点・相違点を見だし，主題を大切にしつつも，新たに表現していきました。

好きな詩人を選び，詩人の人生について，漢詩の入門書2冊を読み比べました。初歩的な段階ではありますが，次の2点に留意して書くよう指導しました。

- ① 詩人の人生に対する感想と感想の根拠となった文章とを区別して書くこと。
- ② 根拠となった文章の出典を明示すること。

本生徒は，根拠となる文をつなげるために，自分なりに要約しながら引用することに意欲的に取り組みました。表彰式の作品発表の説明でも「この作業を通して，李白がどのような人生を送ってきたのか知ることができたと同時に，文章のまとめ方も学ぶことができました。」と，振り返っていました。

総合的な感想で「漢詩を通して，李白や孟浩然の過去に触れて，新しい一面が見れて（中略）楽しい単元でした。」と書いているように，自らのものの見方，感じ方，考え方を見つめ直したり深めたりしたことを豊かに表現している作品となりました。